

神奈川の自然シリーズ 12 神奈川の腐生ラン

勝山輝男 (学芸員)

葉緑素をもたず、共生菌を通して落葉などから養分を得ている植物を腐生植物といいます。ラン科植物はもともと菌類と共生しているので、無葉の腐生植物になる素質があるといえます。光をめぐる植物どうしの競争から逃れ、他の植物が生えないような暗い林内を棲家としたランは、しだいに横着になり、自前で光合成をすることを止めてしまったのでしょう。

神奈川県からはサカネラン、ヒメムヨウラン、ツチアケビ、クロムヨウラン、タシロラン、オニノヤガラ、アキザキヤツシロラン、クロヤツシロラン、キバナノショウキラン、ヒメノヤガラ、マヤランの11種の無葉の腐生ランが記録されています。マヤラン以外の10種は完全に葉緑素を失ってはいませんが、マヤランの花茎は緑色で、まだ光合成をしていた頃の名残が残っています。

腐生ランは花期にだけ地上に姿をあらわし、成長している様子を見ることはほとんどありません。特にクロヤツシロランでは、果期には高さ10~20cmになり目立つのですが、花も落葉の間に隠れるように咲き、簡単には観察できません。地下には長さ2~4cm、直径6~10mmの塊茎があり、9~10月にここから花茎を伸ばし花を咲かせます。花の時期には塊茎の花茎とは反対側に3~4本の根のようなものを伸ばし、そこに白い菌糸のようなものがつき、落葉や落枝からみついています。これが落葉から養分を摂取する仕組みなのでしょう。果期にはこの根のようなものは塊茎からとれてしまいます。冬を越した塊茎からは、6月頃に花茎のついていた位置から根のようなものを伸ばし、養分の摂取をはじめます。摂取した養分は新しい塊茎に貯え、秋には新しい塊茎の先に花茎を伸ばしま

す。これについては勝山(1994)にくわしく報告しました。

タシロランの生活史は大森(1984)に報告がありますが、その他の腐生ランの生活史についてはほとんど報告がありません。共生菌についてもオニノヤガラやツチアケビがナラタケと共生しているとされています(前川, 1971)が、多くは不明のままです。

文献

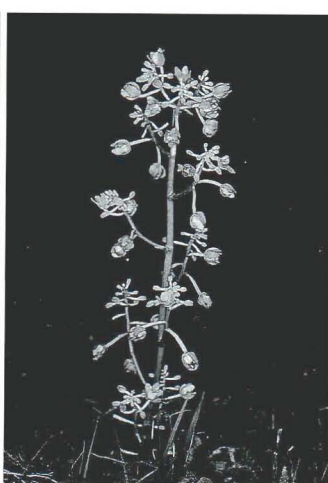
- 大森雄二, 1984. 三浦半島で発見されたタシロラン. 神奈川自然誌資料(5):71-73.
 勝山輝男, 1994. クロヤツシロランの地下部について. 神奈川自然誌資料(15):59-62.
 前川文夫, 1971. 原色日本のラン, 495pp. 誠文堂新光社, 東京.



サカネラン
西丹沢 1995年5月11日



タシロラン
三浦半島 1992年7月10日



ツチアケビ
西丹沢 1995年8月5日



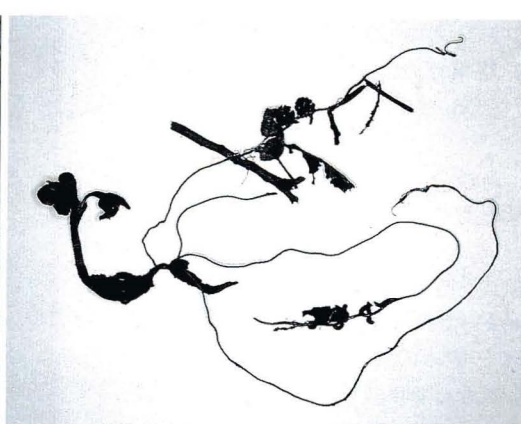
キバナノショウキラン
西丹沢 1994年7月16日



クロヤツシロランの果実
横浜市緑区 1987年11月



クロヤツシロランの花
横浜市緑区 1988年10月10日



塊茎から根のようなものを伸ばした花期のクロヤツシロラン
横浜市緑区 1989年9月23日